

## 「汚れた霊を追い出す」

マルコの福音書 9:25～29

### はじめに

イエシュアの衣が白く輝き、エリヤとモーセが現れ、雲がわき起こり、そこから神の御声が発せられるという「変貌山の奇蹟」。この不思議な出来事を経て後、再び弟子たちと群衆のもとへ戻られたイエシュアの御前に、汚れた霊に取りつかれた人が連れて来られました。それは先に弟子たちがこの人から霊を追い出そうとしたのですが、彼らにはそれができなかつたためであったことが記されています。今日の箇所にはイエシュアがどのようにしてこの汚れた霊を追い出されたのか、そしてなぜ弟子たちにはそれができなかつたのかが記されています。この箇所から、人に取りついた悪霊を追い出す方法や、悪霊への全般的な対処法を説くようなメッセージをすることもできるかもしれませんが、しかしそれでは結果的に悪霊や、それがもたらす様々な災いや問題に目を向けることになり、それを解決するための道具として神を、イエシュアを利用するような行為へと私たちを導いてしまうおそれがあります。言うまでもないことですが、人のために神が存在するわけではありません。神のご計画のために人は造られ、また存在しているのです。私たち人の短い生涯の些細な出来事の中に神を押し込めるのではなく、神の壮大なご計画に目を留め、その中に自らの思いや考えを置くことこそが私たちの取るべき態度、生き方であると信じます。ですから私たちは今日も神のご計画と、その完成である「神の国、御国」について思いを巡らし、これを待ち望むために聖書の御言葉と向き合ったいと思います。

### 1. 口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:25 イエスは、群衆が駆け寄って来るのを見ると、汚れた霊を叱って言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしはおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」

イエシュアは「汚れた霊を叱って言われた」とあります。ここに使われている「汚れる、汚れている」という意味のヘブル語ターメー(תָּמַא)は本来、混血、雑婚すなわち異なる国の異なる民族の者同士が結ばれて夫婦、家族となることを意味する言葉です(創世記 34:5)。聖書においてそれは特にイスラエル人と異邦人、すなわちユダヤ人とそれ以外のすべての民族との結婚を意味します。ユダヤ人たちはこの今で言うところの国際結婚に対して、ターメー「汚れる」と捉え、昔から非常に否定的でした。なぜなら異邦人とは、イスラエルの神以外の異教の神々を信じる民のことであり、そのような民と結ばれるということは、イスラエルの中に偶像礼拝をもたらすおそれがあるためです(ただし異邦人がその神々を捨て、イスラエルの神だけを自分の神とするならば話は別で、遺伝的には異邦人であっても、同じイスラエル人、同族として加えられました)。イエシュアはこの「汚れた霊」を、「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊」と言い換えて呼ばれました。イスラエルの民、ユダヤ人は神の選びの民です。それは神の御声、御言葉に聞き従うしもべ、またそれを語り、教える民すなわち神の祭司の民ということです。しかしそんな彼らが異邦人との雑婚などによってひとたび偶像礼拝を行うなら、それらはできなくなってしまう。実際に旧約聖書に記された彼らの歴史は、そのような出来事、罪の連続でした。実に彼らは何度も何度も神に逆

らい、偶像礼拝の罪に陥り、神のしもべ、祭司としての本来の機能を失いました。ですからこの箇所に記載された「汚れた霊」また「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊」に取りつかれた人とは、イスラエルの民、ユダヤ人を表す「型」であると考えられます。そしてイエシュアは、その人からこの霊を追い出すことで、ご自分がイスラエルの民を再び神のしもべまた祭司の民として回復させる者であることを表しておられるのだと考えられます。

かつて神はそのしもべモーセを呼び出され、こう言われました。

【新改訳 2017】 出エジプト記

4:11 …「人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし、【主】ではないか。

4:12 今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。」

この御言葉によると、イスラエルの民に罪を犯させ、墮落するように仕向けたのは、なんと神ご自身「それは、わたし、主ではないか」ということになります。これには驚かれる方もおられるかも知れませんが、神はあえて人に罪を犯させる、そのように導かれることがあります。なぜそのようなことをなさるのか、そのわけはご自分が人を罪から救う神であることを表すためです。医者が医者としての力を発揮するために絶対に必要なもの、それは患者、病人です。医者がどれだけ「私は名医、優れたドクターだ」と叫んでも、それだけでは誰にも認められません。ですから神はご自分が不可能なことなど一つもない神であることを表すため、たとえ罪の限りを尽くし、ついには滅び去ってしまったイスラエルの民のような者たちでさえも造り変えて、ご自分の選びの民として回復させることができる力を持った神であることを証明するために、神はあえてこの民をそのように仕向けられたのです。つまり、すべては神の栄光が表されるため、その御業の偉大さがすべてのものの目に認められ、そしてほめたたえられるためなのです。神のご計画も、その完成である「神の国」も、その目的はただ神の栄光のため、他の何ものでもない、ただ神だけがほめたたえられるため、ということにあるのです。人も御使いも、悪魔でさえも、この天地宇宙のすべては、ただそのためだけに存在していると言っても決して過言ではありません。神の御子、キリストすなわちメシアであるイエシュアこそがその象徴であり、神の栄光のためのご計画を成就、実現、完成させる御方なのです。

少し話が飛躍しすぎたかも知れませんが、イスラエルを神のしもべ、祭司の民として回復させる御方としてのイエシュアの「型」が今日の箇所には表されていると考えられます。

## 2. 叫び声

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:26 すると霊は叫び声をあげ、その子を激しく引きつけさせて出て行った。するとその子が死んだようになったので、多くの人たちは「この子は死んでしまった」と言った。

9:27 しかし、イエスが手を取って起こされると、その子は立ち上がった。

イエシュアの命令に対し、「霊は叫び声をあげ…出て行った」とあります。ここに使われている「叫ぶ」という意味のツァーク(**קָרָא**)という言葉は本来このような出来事で使われました。

【新改訳 2017】創世記

4:10 主は言われた。「いったい、あなたは何と何をしたのか。声がする。あなたの弟の血が、その大地からわたしに向かって叫んでいる。

4:11 今や、あなたはのろわれている。そして、口を開けてあなたの手から弟の血を受けた大地から、あなたは追い出される。

これは神がアダムの息子カインに語られたものです。カインは弟のアベルを殺してしまいました。殺されたアベルは神がお選びになった「義人」と呼ばれる存在でした（マタイの福音書 23:35）。そんな弟を妬み、カインは彼を手にかかけました。これは単なる殺人ではなく、神の選び、御心に逆らう、敵対する行為です。神はアベルの「血が、その大地からわたしに向かって叫んでいる。」と言われ、ここに聖書で最初のツァーアクが使われています。この結果カインは「のろわれ…追い出される」者となりました。ですから本来ツァーアクには、「義人」を殺す、すなわち神に敵対する者は「のろわれ…追い出される」という意味があると考えられます。イエシュアの命令によって、汚れた霊は「叫び声をあげ」、そして追い出されました。この様子は、やがてイスラエルの民、ユダヤ人に敵対するすべての者たちを地上から追い出し、これを一掃するために、イエシュアがこの地上に来られる「イエシュアの地上再臨」を表した神のご計画の「型」と考えられます。このように、イエシュアが地上再臨される目的は、イスラエルを神のしもべ、祭司の民として回復させ、同時にこの民に敵対する者すなわち神に敵対するすべての者をこの地上から追い出すためのものであることが表されていると考えられます。

### 3. 起こされる

こうして汚れた霊は、イエシュアによって人から追い出されました。「するとその子が死んだようになったので、多くの人たちは「この子は死んでしまった」と言った。」とあります。この様子もまたイスラエルの民の姿と重なります。聖書において、また人類史においても彼らイスラエルの民、ユダヤ人は世界をさまよう流浪の民、すなわちその国土を奪われ、土地から追い出された、国を失った民、滅びた国の民となっているからです。実際に A.D70 年、ローマ帝国によってエルサレムの神殿が破壊され、世界の地図上からユダヤ人の国イスラエルは完全に消滅しました。まさに世界中の誰もがイスラエルは滅びた「死んでしまった」と言ったのです。A.D1948 年に奇蹟的に一部の国土を取り戻し、表面的には国として存在していますが、総人口の約 30%がムスリム（イスラム教徒）のアラブ系民族などの異邦人で占められており、かつてのユダヤ人国家ではなくなっています。そしてそんなユダヤ人たちの多くは、今もなおイエシュアが神の御子メシアであることを認めず、彼らの神のご計画に対する目は、未だ固く閉じられたままです。

しかしその目を、再臨のイエシュアが開かれます。ここでイエシュアは「手を取って起こされると、その子は立ち上がった。」とありますが、「手を取って」という箇所が使われているハーザク(קִיָּץ)は本来、「主のあわれみによって滅びを免れる、助け出される（創世記 19:16）」という意味合いがあり、かつて天から下った火と硫黄によって滅ぼされたソドムとゴモラの町から、間一髪助け出されたロトについての出来事にその最初の言及があります。つまりイエシュアもまた神による滅びが地上に起ころうとするその時に、イスラエルの民を救い出されるということが表されていると考えられ、それは世の終わりの大患難

の時、獣と呼ばれる反キリストがユダヤ人たちを亡き者にしようとするその時、イエシュアが地上再臨され、獣を滅ぼし、イスラエルを救うという神のご計画を指し示していると考えられます。

そして「**起こされる**」「起こす」という意味で使われているヘブル語はウール(וּר)ですが、この言葉は体を起こす、いわゆる起き上がるという意味ではなく「目覚める、目を開ける」という意味の言葉です。しかしこのウール、本来の意味はその真逆で「盲目になる」という意味で、最初の言及は先ほどあげた出エジプト記 4:11 です。神は盲目になったその目を開けることがおできになる御方です。その事実を表すにはまず誰かの目が盲目になる、目が見えなくする必要があるということです。彼らユダヤ人たちが盲目になっている、見えなくされていることとはただ一つ、それはナザレ人イエス、イエシュアこそがキリストすなわち神の御子メシアであるというこの事実です。彼らは旧約聖書の数々の預言に記されたメシアを、イスラエル王国を再興してくださる神の御子が来られるのを、昔から信じてずっと待ち続けているのですが、それがイエシュアであることに気づいていない、受け入れられない、認められないのです。その閉ざされた目を見えるようにしてくださるのは、やはりイエシュアご自身であるということが表されているのです。世の終わりに再臨されるイエシュアによって救い出され、目が開かれるイスラエルの民、ユダヤ人の姿が、この「**イエスが手を取って起こされると、その子は立ち上がった。**」という記述には表されていると考えられ、再臨のイエシュアによって彼らは、神の選びの民、神のしもべ、祭司の民として、まさに「**死んだようになった**」状態、状況から回復される、復活するという神のご計画の「型」として表されていると考えられます。

#### 4. 祈りによらなければ

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:28 イエスが家に入られると、弟子たちがそっと尋ねた。「私たちが霊を追い出せなかったのは、なぜですか。」

9:29 すると、イエスは言われた。「この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追い出すことができません。」

イエシュアは弟子たちの質問に対し、「**祈りによらなければ…できません**」言われました。みなさんは祈りについてどう考え、どう捉えておられますか。目を閉じ、手を組み、静まって神に向かって話し、アーメンと言うのが祈りだと思われませんか。ヘブル語では「祈り」のことをテフィッラー(תְּפִלָּה)といい、この最初の言及はⅡサムエル記 7:27 です。

Ⅱサムエル記【新改訳 2017】

7:26 こうして、あなたの御名がとこしえまでも大いなるものとなり、『万軍の【主】はイスラエルを治める神』と言われますように。あなたのしもべダビデの家が御前に堅く立ちますように。

7:27 イスラエルの神、万軍の【主】よ。あなたはこのしもべの耳を開き、『わたしがあなたのために一つの家を建てる』と言われました。それゆえ、このしもべは、この祈りをあなたに祈る勇気を得たのです。

7:28 今、【神】、主よ、あなたこそ神です。あなたのおことばは、まことです。あなたはこのしもべに、この良いことを約束してくださいました。

これはイスラエルの王ダビデが祈った「祈り」の言葉です。ここに聖書で最初のテフィッターがあります。ダビデはイスラエルの王となった時、神の家すなわち神殿を建てようと決意しました。その時神は「わたしがあなたのために一つの家を建てて」、つまり神の御手によって、神ご自身がダビデの、イスラエルのために国家を建て上げると言われ、「この良いことを約束してくださいました」。このように「祈り」テフィッターとは本来、神がその御国をお建てになるという約束を指し示す言葉であると考えられ、「神の国」のご計画を直接的に指し示す言葉であると考えられます。またイエシュアご自身もこのように教えておられます。

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

11:1 さて、イエスはある場所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

11:2 そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。』

このように、祈りとは本来、「神の国、御国」を求めることであると言えます。そして今日の箇所に記載された出来事すなわち、汚れた霊に取りつかれた人をイエシュアが解放し、死んだようになっていたこの人を起こし、目覚めさせたというこの出来事の中に、神のご計画が「型」となって表されているということです。それはつまり神の民イスラエルの回復がイエシュアの地上再臨によってなされる、ということであり、それは「神の国、御国」がこの地上に建てられることとまったく同義であるということです。

## 5. イスラエルの神

イスラエル、ユダヤ人そしてヘブル語。これらは一見私たちの生活、人生とはまったく無縁のように感じられます。しかしだからと言ってこれらに対して心を閉ざし、目を逸らすなら、それはすべてではないにしても神を拒絶、否定することになります。なぜなら私たちの神は、天と地とその中にあるすべてを創造された唯一の神というだけでなく、アブラハム、イサク、ヤコブの神、イスラエルの神とも呼ばれており、何より神ご自身が、ご自身を指してそのように名乗っておられるからです。この事実を軽視、あるいは無視して、ただ自分の小さな問題を解決してもらうための、自分の小さな思いや願いを叶えるための神とすることのないようにしましょう。そのためにできること、それはイエシュアが教えられたとおり、「御国が来ますように」とまず祈ることです。イスラエルの神が、御子イエシュアによって建て上げるその国の実現を思い、待ち望みつつ祈り続けることです。それは小説やドラマ、映画の物語の内容に夢中になることに似ています。遠い異国の物語でも、空想の世界のもので、私たちはそれに思いを巡らせる力を確かに持っているのです。それならば必ず、イスラエルの神の物語にも思いを巡らせることができるはずです。そのために聖書を大いに用いてくださいますように。分からないことがあれば私でも銘形先生にでもどんどん質問してきてください。喜んでお付き合いいたします。どうか父なる神がお遣わし下さる聖霊によって、私たちの神に対する興味と理解がますます深められますように。